

## 夏

群馬県立女子大学名誉教授 北川 和 秀

### ◎夏

#### 【あふち】（せんだん）

日本挽歌一首（長歌省略。反歌のうち一首）

- ① 妹が見し棟の花は散りぬべしわが泣く涙いまだ干なくに（五・七九八）

霍公鳥を詠む歌二首（そのうちの一首）

- ② 珠に貫く棟を家に植ゑたらば山霍公鳥離れず来むかも（一七・三九一〇）

右は、四月二日に、大伴宿祢書持、奈良の宅より兄家持に贈れり。

橙橘初めて咲き、霍公鳥翻り嚶く。此の時候に対ひて、詎そ志を暢べざらむ。

因りて三首の短歌を作りて、鬱結の緒を散らさまくのみ。（そのうちの一首）

- ③ 霍公鳥棟の枝に行きて居ば花は散らむな珠と見るまで（一七・三九一三）

右は、四月三日に、内舍人大伴宿祢家持、久迩の京より弟書持に報へ送れり。

#### 【うのはな】（うつぎ）

式部大輔石上堅魚朝臣の歌一首（夏雑歌）

- ① 霍公鳥来鳴き響もす卯の花の伴にや来しと問はましものを（八・一四七二）

右は、神亀五年戊辰、大宰帥大伴卿の妻大伴郎女、病に遇ひて長逝す。時に勅使式部大輔石上朝臣堅魚を大宰府に遣して、喪を弔ひ并せて物を賜ふ。その事既に畢りて、使と府の諸卿大夫等と、共に記夷の城に登りて、望遊せし日に、この歌を作れるなり。

大伴家持の霍公鳥の歌一首（夏雑歌）

- ② 卯の花もいまだ咲かねば霍公鳥佐保の山辺に来鳴き響もす（八・一四七七）

- ③ 鶯の通ふ垣根の卯の花の厭き事あれや君が来まさぬ（一〇・一九八八）夏相聞

④春されば卯の花ぐたしわが越えし妹が垣間は荒れにけるかも（一〇・一八九九）

春相聞

【ふぢ】

防人司佑 大伴四綱の歌二首（そのうちの一首）

①藤波の花は盛りになりにつけり奈良の都を思ほすや君（三・三三〇）

山部宿祢赤人の歌一首

②恋しければ形見にせむとわが屋戸に植ゑし藤波いま咲きにけり（八・一四七一）

十二日、布勢の水海に遊覧し、多祜の湾に船泊てして、藤の花を望み見て各懐を述べて作る歌四首（そのうちの一首）

③多祜の浦の底さへにほふ藤波を挿頭して行かむ見ぬ人の為（一九・四二〇〇）  
次官内蔵忌寸繩麻呂のなり。

霍公鳥を詠む歌一首 短歌を并せたり（そのうちの短歌）

④藤波の繁りは過ぎぬあしひきの山霍公鳥などか来鳴かぬ（一九・四二一〇）  
右は、二十三日に、掾久米朝臣繩和ふ。

【たちばな】

大宰帥大伴卿の和ふる歌一首（夏雑歌）

①橘の花散る里の霍公鳥片恋しつつ鳴く日しそ多き（八・一四七三）

大伴書持の歌二首（そのうちの一首）夏雑歌

②我が宿の花橘に霍公鳥今こそ鳴かめ友に逢へる時（八・一四八一）

霍公鳥を詠む歌二首

③橘は常花にもが霍公鳥住むと来鳴かば聞かぬ日無けむ（一七・三九〇九）  
④珠に貫く棟を家に植ゑたらば山霍公鳥離れず来むかも（一七・三九一〇）

右は、四月二日に、大伴宿祢書持、奈良の宅より兄家持に贈れり。

橙橘初めて咲き、霍公鳥翻り嚙く。此の時候に對ひて、詎そ志を暢べざらむ。  
困りて三首の短歌を作りて、鬱結の緒を散らさまくのみ。

⑤ 霍公鳥何の心そ橘の珠貫く月に来鳴きとよむる（一七・三九一二）

⑥ 霍公鳥棟の枝に行きて居ば花は散らむな珠と見るまで（一七・三九一三）

右は、四月三日に、内舍人大伴宿祢家持、久迹の京より弟書持に報へ送れり。

十六年四月五日に、独り平城の旧き宅に居て作る歌六首（そのうちの二首）

⑦ 橘のほへる香かも霍公鳥鳴く夜の雨にうつろひぬらむ（一七・三九一六）

⑧ 鶉鳴く古しと人は思へれど花橘のほふこの宿（三九二〇）

右は、大伴宿祢家持の作なり。

家婦が京に在す尊母に贈らむが為に、詠へらえて作る歌一首 短歌を并せた

り（短歌は省略）

⑨ 霍公鳥 来鳴く五月に 咲きにほふ 花橘の かぐはしき 親の御言 朝暮に

聞かぬ日まねく 天離る 夷にし居れば あしひきの 山のたをりに 立つ雲を  
外のみ見つつ 嘆くそら 安けなくに 思ふそら 苦しきものを……

（一九・四一六九）

【つきくさ】（つゆくさ）

大伴の坂上家の大嬢、大伴宿祢家持に報へ贈る歌四首（そのうちの一首）

① つき草の移ろひやすく思へかもわが思ふ人の言も告げ来ぬ（四・五八三）

② つき草に衣色どり摺らめども移ろふ色といふが苦しき（七・一三三九）

③ 朝咲き夕は消ぬるつき草の消ぬべき恋もわれはするかも（一〇・二二九一）

秋相聞

【こなぎ】

① 上毛野伊香保の沼に植ゑ小水葱かく恋ひむとや種求めけむ（一四・三四一五）

上野国東歌

② 苗代の小水葱が花を衣に摺り馴るるまにまに何か愛しけ（三五七六） 未勘国東歌

【はまゆふ】

柿本朝臣人麻呂の歌四首（そのうちの一首）

○み熊野の浦の浜木綿百重なす心は思へど直に逢はぬかも（四・四九六）

【ゆり】

大伴坂上郎女の歌一首（夏相聞）

①夏の野の繁みに咲ける姫百合の知らえぬ恋は苦しきものそ（八・一五〇〇）

同じ月（天平感宝元年五月）九日、諸僚、少目秦伊美吉石竹の館に会ひて  
飲宴す。時に、主人、百合の花蘂三枚を造り、豆器に置ね置きて、賓客に  
捧げ贈る。各此の蘂を賦して作る三首

②あぶら火の光に見ゆるわが蘂さ百合の花の笑まはしきかも（一八・四〇八六）

右の一首は、守大伴宿祢家持のなり。

③燈火の光に見ゆるさ百合花後も逢はむと思ひそめてき（四〇八七）

右の一首は、介内蔵伊美吉繩麻呂のなり。

④さ百合花後も逢はむと思へこそ今のまさかもうるはしみすれ（四〇八八）

右の一首は、大伴宿祢家持の和へなり。

【なでしこ】

大伴宿祢家持、同じ坂上家の大嬢に贈る歌一首

①石竹のその花にもが朝な朝な手に取り持ちて恋ひぬ日無けむ（三・四〇八）

同じ月（天平勝宝七歳五月）の十一日、左大臣橘卿、右大弁丹比国人真人の  
宅に宴する歌三首（そのうちの一首）

②わが屋戸に咲ける石竹花幣はせむゆめ花散るないやをちに咲け（二〇・四四四六）

右の一首は、丹比国人真人の、左大臣を寿く歌なり。

十八日、左大臣の、兵部卿橘奈良麻呂朝臣の宅に宴する歌三首  
③石竹花が花取り持ちてうつらうつら見まくの欲しき君にもあるかも

右の一首は、治部卿船王のなり。

（二〇・四四四九）

④わが背子が屋戸の石竹花散らめやもいや初花に咲きは増すとも（四四五〇）

⑤うるはしみ吾が思ふ君は石竹花が花に比へて見れど飽かぬかも（四四五一）

右の二首は、兵部少輔大伴宿祢家持追ひて作れり。



171. ニッポンクチバナ (改牧1327)



330. フジ (改牧1297)



705. ウツギ (改牧978)



133. センダン (改牧1544)



2446. ヒメユリ (改牧3432)



2356. ハマオモト (改牧3512)



2339. コナギ (改牧3536)



2277. ツユクサ (改牧3597)

『原色牧野植物大図鑑』  
による